

4. 中国福建省における北清事変（義和団事件）期の測図作業とそれによる

「東亞五万分一圖」について

小林 茂（大阪大学名誉教授）

栗栖晋二（東京大学理学系研究科地球惑星科学）

はじめに

明治期の日本の外邦図作製を考えるに際して、日清・日露両戦争の戦間期は興味深い時期となっている。日清戦争中に派遣された臨時測図部（第一次）は遼東半島で広範な測量を行い、戦争終結後になると朝鮮と台湾に移って測量を展開するが、1896年9月15日にいったん解散される。同年末からは戦史用の地図作製などをめざした測量が少数の技術者により朝鮮で開始され、さらに占領が続いていた威海衛で縮尺2万分の1の測量が1897年に6名の技術者によって行われるのはその続きとみられる。

しかし1899年以後になると、各地への小人数の技術者の派遣がつづき、1904年2月の日露戦争の開戦に至る（小林、印刷中 a: 表1）。この時期の日本は、つぎの戦場の地理的情報を蓄積しようとしていたと考えられ、その焦点は大きくみると三地域に合わせられていた。

まず1899年に派遣が開始されたのは、清国の福建省である。福建省は台湾の対岸に位置し、両者の交通・交流は密接で、日清戦争で台湾を領有することになった日本は、清国で利権を獲得しようとする列強を意識しつつ、この地域への勢力範囲の拡大をめざした（長南2019: 170-174）。地図作製についても、後述するように、まず日本人居留地の測量のほか、主要交通路の調査を行った。後者は明らかに日本軍の進撃に備えた

ものであった。また翌1900年になると北清事変が発生し、それに乗じて日本は本格的な出兵を企画するが、実施直前になって中止となった（「厦門事件」、1900年8月）。しかし、その後4名の測量技術者を派遣して、広域的な測量を行わせた。彼らの福建省における作業は長期に及び、1902年3月までつづけられた。

もう一つが北清事変の主戦場になった北京周辺での測量で、陸軍将校をリーダーに、白河河口から天津、さらに北京へのルートにくわえ、山海関でも測量を行った（小林・小林2013）。これらの地域については、1880年代に陸軍将校たちの行った歩測とコンパスによる路線測量をもとにする地図があったが、北清事変時の戦時測量はそれを一新するものであったと考えられる。

さらに重要な焦点は朝鮮半島の北部であった。来るべきロシアとの戦争で参謀本部はこの地域が最初の戦場になると予想しており（長南2015: 112-119）、1903年には複数の小グループによって偵察と地図作製がおこなわれた（小林2011: 102-109）。しかしロシアとの本格的陸戦が鴨緑江の渡河作戦（1904年5月）から開始されたことを想起すると、この参謀本部の予想はまったくはずれたと考えられる。

このように当時の日本陸軍の関心に沿った一連の測量と地図作製は、しかしながら十分に検討されていない。ここでは以上のような測量と

地図作製のなかで、福建省でおこなわれた広域的な測量の成果としての「東亞五万分一圖」に焦点を当てて紹介してみたい。2022年8月末～9月中旬に、筆者らはアメリカ議会図書館で外邦測量に関連した地図を調査し、そのなかでとくにまとまったものとしてこの「東亞五万分一圖」をスキャンすることができた。この図群は、国立国会図書館にも一部収蔵されているが、アメリカ議会図書館の収蔵図の方が広い範囲をカバーしており、これからほぼその全容を知ることができる。また基本的に秘密測量によるとはいえ、想像以上の内容で、記入された漢字地名も多く、その多くにはカタカナで読みも記入されているほどである。

この時期の福建省の地図に注目する背景として、さらにつけくわえておきたいのは、この地域の測量に関する陸軍側の意図や、技術者の派遣の経過、さらに個々の技術者の作業地域を比較的詳しく示す資料が、アジア歴史資料センターから公開されている点である。この種の秘密測量では、関連する資料が残されている場合は少なく、作製された地図と比較対照しつつ検討できるのはまれなケースといってよい。

これを考慮して本稿では、まず残されている主要な資料を紹介する。またこの測量の前段階ともいえる作業が、上記のように1899年に行われており、つぎにこれに触れてから、作製された地図の紹介に移りたい。

なお後述するように、測量が行われたのは福建省の沿海地域である。中国大陸の南部沿海地域については、19世紀の早い時期から英国が海図を整備しており、測量だけでなく製図においてもこれらが参照された可能性は高い。以下ではこの点にも留意しつつ検討を進めたい。

また作製された地形図では、上記のように記入された漢字地名の多くにその読みが記入されている。それがどのように付されたかという点も、台湾に関する初期の日本製海図の例を考慮すると（鳴海・渡辺・小林 2022）、関心の引かれるトピックである。海軍水路寮は、台湾遠征（1874年）前に当該地域の英国製海図の翻訳（覆版）を行った際にそれに記入されたアルファベットによる地名を、現地調査なしで漢字表記することを試みた。ただし台湾への進軍を契機にその一部が誤っていることを知ることになったが、他方で英国製海図の地名をやはり現地調査なしで漢字表記した清国製海図に影響されたこともあって、その誤りの修正が遅れ、それらについて現地でつかわれる漢字地名が表示できるようになったのは、日清戦争後に台湾を領有してからであった。これに対して、福建省の場合は現地調査を行っており、事情が大きくちがうが、漢字地名の表記にともなう課題には共通するものがあり、現地で使われる地名をどう漢字で表記するか、さらにその読みをどう表記するかという点では、類似する努力が要求されるのである。

ところで、この測量で作製された地形図は、「東亞五万分一圖」と命名された。日本がその時期に中国大陸について作製しようとしていた図のシリーズの名称にしようとしたことがうかがえるが、ともあれこれはその最初の例と考えられる。中国大陸における地形図の縮尺が1907年以後基本的に10万分の1とされて（高木 1944）、5万分の1図はあまり作製されることがなくなっただと考えられるが、こうした転換の前に作られた図としても注目したい。

なおこの図群については、日清戦争期にむけ

て準備された「清國二十万分一圖」との関連ですでに触れる機会があった（小林・片山 2021: 97-98）。本稿でも、同様の視点から検討する。

1. 1900～1902 年の福建省における陸地測量部の技術者の測図作業に関する資料

福建省での測図作業は、陸地測量部の測量手、久間金五郎をリーダーに、河野亮之介・中尾芳太郎・由比勇造と合わせて 4 名で行われた。久間は日清戦争時に派遣された臨時測図部の第 1 班（鳳凰城地方担当）に参加したことがあった（「臨時測図部編制表」、小林解説、印刷中）。また「雇員」と記される他のメンバーのうち河野と中野は、青山良敬をリーダーとする朝鮮半島での測量に 1896 年から参加していた（アジア歴史資料センター資料：C03023067300）。他方由比は、翌年 1897 年からやはり青山のグループに加わっており（小林 2011: 102-104）、いずれも海外での測量の経験を持っていたことになる。

彼らの活動に関連する資料を整理して示したのが表 1 で、年次順にその概要を示している。まず注目されるのは、現地で測量技術者たちの指揮に当たる、参謀本部第三部に属した藤井幸槌陸軍歩兵太尉（アジア歴史資料センター資料：C15120226300）に与えた指示で、「貴官ハ往復凡ソニヶ月ノ予定ヲ以テ清国福建省ニ赴キ左ノ件ヲ履行スヘシ」として、その第一に「陸地測量部ヨリ派遣セラルゝ陸地測量手ニ戦略及ヒ戦術上ヨリ測量着手ノ順序方法及ヒ地域地点等ニ関シ訓示ヲ與フルコト」として、測量技術者の指揮が最も重要な任務であった。その他の任務としては、福建省の沿岸地域を中心に道路およびその沿道の地形、水利、鉄道敷設の難易、さらに福州―厦門間の上陸地点の研究のほか、こ

れらの経過地方の軍事統計の概略の把握が挙げられており、藤井の福建省出張の目的はおもに地理情報の収集にあったことが明らかである。これにつづく資料は、久間など 4 名の海外旅券の調達に関連し、その頃に福建省に派遣される技術者の人選が決まったことが推測される。後に示す彼らの「経歴書」で、10 月 25 日に清国派遣の命令が伝達されたとするのは、それを受けてのことであろう。そして同月 31 日に彼らは東京を出発し、上海経由で 11 月 12 日に厦門へ到着した。

参謀本部次長から外務総務長官への回答案に移ると、派遣された技術者の任務にくわえ、彼らが上記藤井大尉の訓示を受けているとし、現地の領事に対しては、藤井と打ち合わせの上、便宜を与えるよう依頼することとしている。

つぎにあらわれるのは翌年夏になってからの福州駐在の與倉喜平大尉の報告で、現地担当の「總督」の動静のほか、測量技術者たちの作業の様子を示している。その冒頭では「測量技手ノ一行ハ非常ノ熱心ヲ以テ作業ニ従事シ無事福州附近ノ測量ヲ終ヘ（後略）」としつつ、そのごは福州の南方を分散して測量し、10 月に泉州に集合する予定としている。

これにつづく泉州からの久間の報告では、まず福州から分散して測量に当たった技術者と分かれたままなので、彼等の様子はわからないと述べている。つづいて泉州では「民情不穩」で、「道路上ニ於テハ決シテ業ヲ執ル能ハズ」と測量の困難を指摘しつつ、日本人と知ると、人々が集まって妨害しようとし、ある村では日本人を殺そうとする計画があると密告するものもいたとしている。8 月の厦門事件のため、日本への反感が高まっていたのである。

表 1：久間金五郎ほか三名の福建省・浙江省測量に関する資料

時期	タイトル	作成者	内容	アジア歴史資料センター Ref.
1900.10.15 頃	藤井大尉に与ふる訓令案	参謀本部	陸地測量手への測量着手の順序方法、地域地点の訓示など	C09122644500
1900.10.24	清国福建省陸地測量着手の件	陸地測量部	久間金五郎・河野亮之介・中尾芳太郎・由比勇造の旅券について	C09122598500
1900.11.15	次長ヨリ外務総務長官へ回答案	参謀本部次長	測量の任務、現地では藤井幸槌歩兵太尉の指示に従うこと、各領事への連絡依頼	C09122651300
1901.8.4?	与倉大尉報告	与倉大尉	測量技手の動向、福州附近の測量終了	C13032443200
1901.9.22	泉州城内より報告	久間金五郎	分散して作業、泉州民情不穏、河野遭難、福島閣下巡視の伝聞	C09122769900
1901.10.13	厦門記事	福島安正	厦門到着、水師提督訪問など、測量技師に面会	C13032445500
1902.3.9	清國浙江省測量ニ関スル意見具申案	福島安正	1902 年 3 月に終わる福建省の測量に続いて浙江省の測量も必要、浙江省測量計画	C09122853900 末尾 C15120013100
1902.4.4	浙江省測量ニ關シ久間技手外三名ヘノ訓示	與倉喜平陸軍歩兵太尉	浙江省の測量に関する詳細な指示	C09122853900 C15120013100
1903.7.21	経歴書	久間・中尾・河野・由比	各人の福建省・浙江省の測量経過	C03022798900
1903.8.3	久間陸地測量手以下三名賞與之件	参謀總長、大山巖	陸軍大臣に対する賞与授与の上申	C03022798900

さらに「曩日」（先日）河野が遭難し、同じ地域の海岸で日本人が略奪されるなど治安が安定しないと述べる。末尾では「福島閣下」（福島安正少将）の「巡視」がある旨伝聞したことを記している。なお、この報告は陸地測量部長（藤井包總）を通じて参謀本部総務部長（田村怡与造）に伝えられた。

ここにあらわれる福島安正の「巡視」は、高遠（2007）が紹介するように、北清事変で臨時派遣隊司令官を務めた福島が、参謀本部第二部長として事態が収まって以後の華中・華南を視

察するだけでなく、この地域を基盤に活動する張之洞など清国側要人との面談などもめざすものであった。北清事変中この地域の官僚は義和団の鎮圧をめざし、列強側と協調する態度をとっており、張之洞との会談などは順調に進んだ。

福島安正はその間参謀総長の大山巖に連続的に報告をおくっており、この視察は軍事的に意義のあるものと考えられたようである。「厦門記事」と題されたその第 9 号では、陸地測量部の技術者に接したことに触れている。冒頭に 10 月 3 日に厦門に着いたことを記し、訪問した場所で

見聞や会見した相手との談話を日記風に示しつつ、後半では見出しをつけて見聞や感想を示し、その末尾に「測量技師」として、その一名に会って彼等の作製した原図を閲覧したことを記し、「地方人心ノ不穩氣候ノ不便アル等ニモ関セズ屈セズ能ク其任務ヲ尽シ成績ノ最モ著キヲ見ル彼等ノ困難苦心ハ実ニ想像ノ外ニアリ」と述べる。泉州にいた久間が、廈門に移動して福島に作業の状況を報告したと考えられる。

つづく資料（1902年3月）で、福建省での作業の後、久間らを浙江省に移動させて測量を継続させたいという計画を福島が提案するのは、こうした測量技術者との接触とその成果の閲覧が大きな意義を持っていたと考えられる。この提案は実現に移され、つづく資料に見えるように、上記の與倉喜平大尉が久間らに当面の浙江省での作業について詳細な指示を与えることになった。

そのご浙江省での作業を終えて東京に帰った久間らは、とくに浙江省での詳細に行動の記録を示して旅費について会計上の処理を行うとともに、上記のような「経歴書」を提出して経過を説明している（1903年7月）。これについては次々節で詳しく紹介したい。

福建省・浙江省での困難な測量に従事し、その地域の地理情報をもちかえった久間らの業績は高く評価された。続く資料は参謀総長から陸軍大臣に提出された彼等の表彰と賞与の授与の上申である（1903年8月）。それよれば、久間への賞与は200円、中尾・河野・由比への賞与は150円であった。

以上、関係資料の概要を示した。これをみるだけでも久間など4名の測量作業は参謀本部の関心と直結したもので、その経過や成果も参謀

本部の中枢部に報告されていたことがわかる。以下、これらの資料に留意しつつ、久間らの活動とその成果としての地図を検討したい。

2. 福建省における1899年の陸地測量部測量手の活動

まず見ておきたいのは、久間らの来訪以前におこなわれた福建省での測量である。まもなく刊行される予定の『陸地測量部沿革誌（稿本）』（小林解説、印刷中）の1899（明治32）年の記載には、「海外特別任務」として次のような条がある。

（前略）山村（藤吉）中柴（鏐三郎）兩測量手ハ外務省ノ囑託ニ依リ七月上旬ヨリ十月上旬迄清國福建省ノ我專管居留地竝同地方視察図ノ測図ニ従事シ堤（慶蔵）測量手ハ十月上旬ヨリ（翌三十三年ニ亘リ）参謀將校ニ隨行シテ福建省地方ノ旅行目測図ヲ製シ（後略）

最初の山村と中柴のおもな任務は廈門の新設された日本人居留地の測量であったと考えられるが（アジア歴史資料センター資料：B12082542500; A01200882900）、あわせて行われた「同地方視察図」の測図は軍事目的であった可能性がある。

他方堤の場合は、時期から見て、隨行した参謀將校の調査を補助するもので、『清國福建省沿道誌』（アジア歴史資料センター資料：C13032450600）の作製に役立つ地図をつくることであったと考えられる。「沿道誌」は日本陸軍の行軍経路の案内書で、朝鮮半島や満州の主要交通路について作製され、道路の通行状況や沿道の集落の規模などを順に記載する。この種の案内書は1880年代から作製されており、野戦指

揮官たちがポケットに入れて携行するものでい
ずれもサイズが小さい（小林 2017）。堤が作製し
たとされる「目測図」は、本格的な測量によら
ず、沿道の状況をスケッチ風に記録するものと
考えられるが、『清國福建省沿道誌卷之二』には、
100 万分の 1 の「福建省一般圖」が添付されてい
るものの、この「目測図」によると考えられる
ものは見当たらない。

これに関連して注目されるのは、アジア歴史
資料センター資料にみられる 1900 年 12 月の海
軍軍令部副官から陸軍参謀本部総務部長の田村
怡與造に当てた書簡で（C09122694400）、海軍
軍令部の将校が福州から福建省南部の詔安まで
旅行し、歩測・目測によって偵察を行い、また
汕頭については詳しい図を付した報告書を作成
しており、これを送付するので陸軍で刊行して
もよいとしている。これが正しいとすれば、堤
慶蔵は海軍将校に随行したことになるが、それ
に関する資料が見つからず、誤りの可能性が高
い。むしろアジア歴史資料センターの資料見出
し（「福建省沿岸視察報告並附図用済に付返却」）
が示唆するように、陸軍から提供されたこの報
告書を海軍が返却したと考えるべきであろう。
ともあれ、翌 1901 年 2 月には、「福建省沿道誌」
が完成し、20 部を現地に滞在していた上記の藤
井歩兵少佐（大尉より昇任）に送付している（ア
ジア歴史資料センター資料：C0912269600）。

3. 「経歴書」からわかる久間金五郎らの測量活 動

以上から、久間らの来訪以前にすでに主要交
通路については、ややくわしい地図作製が行わ
れていたことがわかる。これに対して、地形図
のような面的広がりをもつ地図を作製すること

が久間らの任務であった。以下ではまず彼らへ
の賞与に関連する書類に付された「経歴書」か
ら見ていきたい（アジア歴史資料センター資
料：C03022798900）。これは福建省・浙江省（一
部安徽省）での彼らの測量の経過を示すもので、
久間ら 4 名は時々落ち合って行動することあ
ったが、作業は基本的に分散して行うもので、
各人 1 通ずつ提出されている。それぞれに興味
深いのが、まずリーダーの久間のものをみたい。

一明治三十三年十月十五日清國へ差遣ノ命
ヲ受ケ陸軍歩兵少佐藤井幸槌殿ニ隨從シ
同月三十一日東京出發上海ニ於テ少佐殿
ト相別レ十一月十二日厦門ニ着直ニ福建
省内ノ機密測図ニ從事ス抑モ當省ノ人民
タルヤ頑味未開ニシテ加之臺灣土匪潜伏
地ヲ以テ稱シ北清事変ノ起リシ以来其影
響頓ニ此地方ニ及ホシ民情甚タ不穩ナリ
シヲ以テ諸種ノ方便ヲ講シ深ク警戒ヲ加
ヘ作業ノ無事ヲ計レリト雖暴行常ニ止ム
時ナク到底作業ヲ繼續スルノ見込絶無ナ
ルヲ考ヘ暫ラク其気焰ヲ避ルニ如カスト
測図方面ヲ變換スルコトニ決シ一行厦門
ニ引揚ケ福州ニ至リ同方面ノ作業ヲ行フ
時將に酷暑ニ際シ炎熱燃ルガ如ク到ル処
惡疫猖獗ヲ極メ加之河川氾濫シ往來ヲ途
絶シ其困難名状スベカラザリシガ幸ニシ
テ事無ク完結ス

一明治三十四年十二月二十日ヨリ惠安縣内
ノ作業ヲ開始ス此地方ノ人民亦慄悍ニシ
テ海賊横行シ旅行ノ危險極リナク到ル処
妨害ヲ受クト雖藥ヲ施シ或ハ烟草ヲ與ヘ
ル等種々ノ手段ヲ盡シテ民心ヲ収攬シ無
事完結ス

一明治三十五年三月七日泉州府ヲ発シ厦門

ニ至リ福建、浙江、江西省増加作業ノ命令ヲ待チ同月二十日厦門乗船同二十一日福州ニ着當地駐在陸軍歩兵少佐與倉喜平殿ノ命ヲ受ケ諸般ノ準備ヲ整ヒ四月五日福州乗船上海ヲ經テ同月十三日杭州ニ着直ニ作業着手ス此地方ノ人民亦福建省ニ於ケル如クニシテ諸種ノ困難ニ遭遇セリ殊ニ臺州府地方ハ暴テ民四方ニ彷徨シ旅人ニ危害ヲ加ヘ形勢頗ル不穩ナルヲ以テ爲スヘク盡スベキノ方便ヲ講シ僅ニ虎口ヲ免レ受命ノ業務ヲ無事完結ス

一明治三十五年七月二十二日ヨリ杭州付駐在陸軍歩兵大尉齊藤季二郎殿ノ命ヲ受ケ浙江、安徽省内ノ作業ニ着手ス當地方ノ人民他地方ニ比シ稍平穩ニシテ無事完結ス

一明治三十五年八月三十日上海乗船九月六日歸京爾來殘務整理中

右之通りニ候也

明治三十六年七月廿一日

陸地測量手 久間金五郎 印

ここでは、浙江省（一部安徽省）の測量まで記述されているが、以下基本的に福建省での測量に焦点を合わせたい。なお示されている軍人の位階は、執筆時のものに合わせられている。

福建省での測量が命令されてから、わずか2週間で東京から出発することになるが、現地で久間らが使用する道具や消耗品（各種紙類・鉛筆など）を急ぎょ購入したことが、その領収書からわかる（アジア歴史資料センター資料：C09122853600）。またこうした消耗品は、清国では調達できなかったようで、ときおり日本から送らせている（同：C09122853700）。

彼らの測量地域やスケジュールは基本的に参

謀本部から派遣された陸軍将校が指示するもので、移動とともに、その将校は藤井幸槌→與倉喜平→齊藤季二郎と変化した。また上記の資料から、彼らには時々報告を送っていたこともわかる。厦門での福島安正に対する説明も、こうした将校がアレンジしたものであろう。他方、初期に活動した厦門周辺で住民の妨害が激しく、福州方面に転進したのは久間らの自主的な判断によると考えられる。

ただしそれでも住民による妨害は避けられず、河野亮之介は1901年5月22日に泉州府晋江磁灶で作業中「土民百餘名ノ襲フ所トナリ荷物ヲ奪ハレ僅ニ身ヲ以テ免ル」という状態に追い込まれた（河野の「経歴書」）。その背景には、「北清事變及厦門事件ノ影響ヲ受ケ人民大ニ激昂シ排外熱盛ナルヲ以テ外國人ノ旅行ヲ差止メラレ旅行券ヲ下附セラレサルニモ拘ラス内地ニ入り作業ニ従事シ后チ上海ヨリ旅行券ヲ受ケ作業ヲ繼續セシガ或ハ宿舍ヲ拒マレ或ハ地名ヲ教ヘス或ハ罵詈ヲ極メ瓦石ヲ投スル等ノ妨害アリシモ種々ノ手段ニ依リ漸次作業ヲ進行シタリシカ土民ノ悪感情益増大シ（後略）」という事情があった。すでに触れた旅券は、福建省での測量が進んだところで受け取ったが、住民の妨害には効果がなかったことがわかる。

彼らの測量は日本人であることを隠さずに行われたこともうかがわれる。具体的にどのような作業を行ったかは、残念ながら「経歴書」に記されていないが、彼等が東京を出発するとき修理した器具や購入した器具からそれを推測することができる。修理した器具としては、「軽便測板」があった。これは三脚の上に設置する小測板で、携帯に便利であったとされる（やや時期が遅いが1920年頃の「特別測圖実施概況報

告」中の「器械器具ニ就テ」を参照、小林解説 2009, 153)。これからすれば、彼らは平板測量を行っていたことになるが、日清戦争時の臨時測図部や日露戦争直前の朝鮮北部での測量作業をみると、図根点（測量基準点）の位置を確定するために平板とアリダードを使用したと推測される。縄を張って基線を設定し、その両端に平板を据えて、交会法により平板上の用紙に図根点を記入するわけである（小林、印刷中bを参照）。

これで確定した図根点にしつつ、画板のような携帯測板を用いて細部の測量を行うが、平板測量では近隣の複数の図根点の位置を把握しているので、細部の測量結果を容易に統合できることになる。

購入した器具としては、「歩足器」があるが、これは「歩測器」の誤記の可能性が高い。「歩測計」・「歩度計」とも言われる、歩数をカウントする道具と推定される。携帯図版による測量に際して、歩数による距離の計測のために用いられたと考えられる。

ところで、上記のうち「軽便測版」を用いる作業は、目に付きやすい。このためか、泉州では泉州府の行政官（「知府」）が「測量器」を携えて泉州附近を移動中の日本人技術者を目撃したことをきっかけに、福建省における日本の測量がその官人たちの間で知られることになり、思わぬ方向に影響を与えることになった（アジア歴史資料センター資料：C15120044400）。この経過は日本側の外邦測量と現地社会との関係を示すものとして興味深く、節を改めて検討することとしたい。

「経歴書」の記載に戻ろう。久間ら一行はときどき連絡などのため一箇所に集合することがあったが、測量作業は基本的に分散して行った。

この分散した作業は、各技術者が単独で行ったのか、それとも随伴する補助者がいたのかは、彼等の行動を考える場合重要なポイントとなる。4 通の「経歴書」のうち、由比のものには、「小官随伴ノ苦力」が登場する。福建省での作業を終わり、浙江省で新たな作業を開始したところ、真夏の酷暑となり、疫病が流行してこの「苦力」に感染し、杭州の日本領事館に到着したときには危篤状態となり、館員の助力を得て「大英醫院」に送り込もうと護送して到着というときに死亡したとしている。このため由比は「夫々手續」をして遺体を埋葬したという。

この「苦力」は、由比に長期間随伴していたと考えられ、それだからこそ死後の「手續」をおこなうだけでなく、埋葬まで雇い主としてすべきことを行ったことがうかがえる。「苦力」と表現されるところから、彼等は測量用の機材だけでなく、技術者の所持品の運搬に当たったと考えられる。同様の「苦力」は他の技術者も雇用していたと考えられるが、残念ながらこうした者の雇用に要した費用については記録がない。他方測量技術者たちの旅費や給与などについては詳しい記録があるので、この種の補助者の雇用については、支給された「作業日当」（1 日あたり判任官〔久間〕は 5 円 50 銭、雇員は 5 円）から支出した可能性が考えられる（アジア歴史資料センター資料：C09122853500; C09122853600）。また「苦力」以外に、通訳に当たるような随伴者がいたかどうかは気にかかるところであるが、この点について地名の調査に合わせて検討したい。

4. 福州における日本製地図の分売要求

久間など一行 4 名が浙江省に移り、そこでの

作業が進行していた時期になって、福建省では孫道仁という高位の軍人から日本の士官学校を卒業し、福建省の武備学校の教官兼通訳官となった者を通じて、駐在日本軍将校に対して、つぎのような要望があった。孫道仁は日本の参謀本部が福建省で測量を行ったと聞いており、地図は今後福建省に入用なので、その払い下げができないかというわけである。この背景には、上記のように測量器具をもった日本人の技術者が現地の行政官に目撃されたという事情があり、福州に在留する與倉少佐はこの要望に応じるべきと考え、旧式の 20 万分の 1 図を提供するのはどうかと参謀本部に問い合わせることとなった（アジア歴史資料センター資料：C15120044400）。他方福島安正は 1900 年 9 月に福州でこの孫道仁の来訪を受け、内容は不明であるが、「要談勘カラス」とその会談の様子を報告に記すほか、その軍営も視察した（アジア歴史資料センター資料：C13032445400）。このときの孫の肩書きは「福勝全軍統領」である。

参謀本部では上記の田村怡与造（ただし当時は参謀本部次長に就任）がこの與倉の問い合わせを検討し、その案を部長会議にはかり（1902 年 6 月 20 日）、第二部が提供する 20 万分の 1 図を提供することになった（アジア歴史資料センター資料：C09122969600）。第二部では、既存の 20 万分の 1 図に與倉から送られた福州—泉州間の見取り図にみられる道路を記入するとともに、既存図に見える主要都市の「掌図」や各地の砲台の記号を削除して製図することになった。

なお、福州—泉州間の道路の記入は、既存の図に記入されていなかったためである（アジア

歴史資料センター資料：C09122864500）。この元図になった見取り図は、上記のように 1899 年に堤慶蔵測量手が参謀将校に随行して描いたものである可能性が大きい。

久間らが帰国する頃で、まだ 5 万分の 1 図ができていない時期のやりとりであるが、このような参謀本部の対応は、中国大陆における日本の測量に対する清国側の疑念を和らげようとするものであった。また前年に孫道仁が将校を率いて訪日し、陸軍の大演習を参観するほか創立する武備学堂に日本軍将校を招へいする希望を持っていたこと（アジア歴史資料センター資料：C06091302900）を考慮したものと考えられる。

このように見てくると、久間らの直面した妨害の一方で、福建省の軍人たちは彼らの作業をちがった角度から認識していたことになる。軍隊の近代化がその課題となっているものの、地図の作製にまで着手できず、まず外国製のものを使おうとする姿勢がうかがえる。なお、福建省側に提供された 20 万分の 1 図の元図は、すでにふれた「清國二十萬分一圖」の系譜をひく図と考えられるが、まだ現物を見る機会がない。この図群のカバーする地域より南側の地域について作製された 20 万分の 1 図についてはすでに報告したが（小林・片山 2021; 2022）、それよりもさらに南の地域におよぶものであり、今後はその図幅名（「長樂」・「平海湾」・「興化」・「泉州」・「厦門」・「漳州」・「福州」）を手がかりに探索してみたい。この 20 万分の 1 図を参照しながら久間らが作業に従事したことが確実で、この点でも参照が望まれる。

5. 福建省の「東亞五万分一圖」

久間らの測量による「東亞五万分一圖」の検討に移りたい。各図幅のサイズは縦が 45.5cm、横が 58.5cm ほどのサイズで、図郭の右上には「東亞五万分一圖〇〇△號」と図郭の属す小図群名とそこにおける番号を示す（小図群名と番号については後述）。右下には高度の表示や等高線の間隔のほか、図式（「遼東半島五万分一圖々式」）についても触れている。左上には測図時期、製版時期、発行時期を示す（表 2 参照）。左下には「陸地測量部」・「參謀本部」と作製機関名を表示する。

図郭の下には縮尺（米突 [メートル]・清里・日本里を示すバーを含む）が示されるが、その脇にはアメリカ議会図書館地理地図部の楕円形の受け入れ印のほか、その請求番号（鉛筆書き）、さらに図幅がアメリカ側に受入れられてから付されたと考えられる意味不明の番号も見られる。さらに重要なのは、アメリカ議会図書館の登録ナンバーで、鉛筆で記入されているとはいえ、当該図をオンラインカタログで確認する場合には不可欠である（表 2 参照）。加えて触れておくべきは裏側に見られる“ARMY MAP SERVICE LIBRARY”の印（下端に“CAPTURED MAP”[接收図]とあり）で上記の図群名や番号などを鉛筆で記入する。Army Map Service（陸軍地図局）は第 2 次世界大戦期にアメリカ陸軍が設立した組織で、地図情報を収集・加工し、大量の軍用図を印刷した。この印は、その時期に中国大陆の軍事情報として、この「東亞五万分一圖」に関心を寄せていたことを示している。そうした軍用図がアメリカ議会図書館に収蔵されることになったのは、Army Map Service が不要になった

地図を移管したことによる。こうした軍用図を受け入れた図書館は全米にあり、有力大学の図書館では多数を収蔵する場合が多い。

なお表 2 では、アメリカ議会図書館蔵図に加えて、国立国会図書館蔵図、さらに東京大学博物館蔵の図のデータも加えている。東大博物館蔵図は「東亞五万分一圖」のタイトルがないが、その意義については、後述したい。

ところで表 2 に示した図は、基本的に秘密測量にもとづくものとはいえ、各図幅の四隅に経緯度を記入する。その東西は経度 15 分、南北は緯度 10 分となる。アメリカ議会図書館で調査できた図郭の接合関係は図 1 のようになる。

東西に 4 図幅（経度 1 度）、南北に 4 図幅（緯度 40 分）の範囲（全 16 図幅）を一図群（上記の小図軍）として、その主要集落名を群名とする。図 1 でアミかけをしている地名がその群名になる。この群の範囲は 20 万分の 1 図の 1 図幅の範囲でもある。北から福安・福州・興化・徳化・南日嶋・泉州・龍岩・厦門・漳州・詔安となり、上記の清国側に提供した 20 万分の 1 図の図幅名と共通するものが多い。ただし、東側が海岸、西側が山地となるため、全 16 図幅の 5 万分の 1 図がそろそろ 20 万分の 1 図幅は一つもない。

なお、5 万分の 1 図幅については、各 20 万分の 1 図幅の北東端の図幅を 1 番とし、南西端の図幅を 16 番とする一連の番号が付されている。それぞれの 5 万分の 1 図幅の右肩には上記のように「東亞五万分一圖 漳州一號」のように図群名と番号名が示され、各 20 万分の 1 図幅のどこに当該 5 万分の 1 図幅が位置するか特定できるようになっているわけである（この例では「長泰」図幅）。

表2：福建省に関する東亞五万分一圖の一覧表（主にアメリカ議会図書館 [LC] 所蔵）

図群	番号	図名	カタカナ表記 ルビ	アメリカ議 会図書館登 録番号 (LCCN)	空 白 部	測圖年	製版年	発行年月日	国会 図書 館収 蔵	備 考
福 安	4*	八寶城			有		明治 33			東大博物館蔵
	8*	寧 徳			有		明治 33			東大博物館蔵
福 州	1*	東樹山島			有		明治 33			東大博物館蔵
	2*	三沙澳			有		明治 33			東大博物館蔵
	3	定 海	ツインハイ	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	4	馬祖山								LC 未収蔵
	5*	飛 鸞			有		明治 33			東大博物館蔵
	6*	羅 源			有		明治 33			東大博物館蔵
	7	連 江	レンゴン	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	8	閩江口	ルビなし	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	11	岩 角	ルビなし	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	12	福 州	ルビなし	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	16	洪 堂	ホンタン	2016589308	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
興 化	5	金峰街	キンフンウー	2016589313	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	6	牛角山	ルビなし	2016589313	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	7	嶼頭瀉	スイタウ■	2016589313	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	8	高山市	コーソアンシー	2016589313	無	明治 35	明治 36	明治 39.2.9	○	
	9	長 樂	ツテ(小)ーロー	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	10	福 清	フーチエン	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	11	漁 溪	ギコイ	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	12	小麥嶼	ショーマーシー	2016589313	無	明治 35	明治 36	明治 39.2.9	○	
	13	南 嶼	ランスイ	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	14	香 山	センソアン	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	15	江 口	カンカー	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	16	興 化	ヒンホハ	2016589313	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
徳 化	4	頼 溪	ライコエ		有	明治 35	明治 38	明治 39.2.9	○	LC 未収蔵 国会図書館蔵
南 日 嶋	9	平 海	ヒングハイ	2016589314	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	13	笏 石	キヤリオ	2016589314	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	14	莆禧城	ポーヒヨンシャ ン	2016589314	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	15	小 岙	ショーソウ	2016589314	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
泉 州	1	楓 亭	ホンチン	2016589309	有	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
	2	恵 安	フィオアン (小)	2016589309	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	3	崇 武	ゾンブ	2016589309	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	4	祥 芝	ションシー	2016589309	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	6	洪頼街	ホンライコイ	2016589309	有	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
	7	泉 州	ソアンチュー	2016589309	無	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
	8	永 甯	イエニン	2016589309	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	11	溪 尾	コヘボヘ	2016589309	有	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
	12	安 海	ワアンハイ	2016589309	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		

	16	同 安	タンヲガ	2016589309	有	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
龍 岩	4	山 重	ソアチン	2016589312	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	8	豊 山	ホンサン	2016589312	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
厦 門	5	深 滬	シンオー	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	9	石 井	チヨジム	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	10	金門島	キンムントー	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	13	劉五店	ラゴテヤム	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	14	厦 門	エームン	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	15	鎮海城	ティンハイシャ ー	2016589307	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
漳 州	1	長 泰	チャウトーワ	2016589306	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	2	海 澄	ハイテイン	2016589306	無	明治 35	明治 38	明治 39.2.9		
	3	浮南橋	ブランキヨ	2016589306	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	4	赤 湖	チャオー	2016589306	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	5	漳 州	チャンチウ	2016589306	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	6	九龍嶺	カウロンニヤ	2016589306	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	7	赤頭嶺	チャタウニヤ	2016589306	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	8	漳 浦	チャンポー	2016589306	有	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		
	11	盤 陀								LC 未収蔵
詔 安	1	大 灣	トワフー	2016589305	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9	○	
	5	六 鰲	ラウゴー	2016589305	無	明治 35	明治 37	明治 39.2.9		

各 5 万分の 1 図幅の位置は、このように経緯度によって配列されているが、久間らが天測を行って経緯度を決めた可能性は低い。とくに経度測定については、慎重なとりあつかいを要する精密機械であるクロノメーターが必要であり、久間らのような小グループではまったく不可能であったと考えられる。海岸に位置するこれらの図幅の経緯度から、先行して作製された海図を参照しつつ特定された可能性が高い。

以上のような観点からこの地域における海図をみると、まず英国によって作製されたことがわかる。当時の清国では、こうした英国海図を翻訳した『大清一統海道總圖』や『八省沿海全圖』（鳴海・渡辺・小林 2022）、さらには『新譯中國江海險要圖志』（陳主編 2004; 沿海形勢及海防編委会編 2011）が刊行されていた。こうした翻訳海図の元図となった英国海図は、まだ十分に特定されていないが、そこにみえる経緯度がお

もに英国海軍の調査船によることに疑問の余地はない。

またここで検討している 5 万分の 1 図の地名は漢字で書かれていることも考慮して、上記のような漢訳海図を参照した可能性を検討したが、経緯線の記入や縮尺、海岸線の形状、地名についてもその可能性がないことを確認した。

他方日本でも、英国が作製した各種の海図の翻訳版（「覆版」と言われる）を作製していた。英国製海図の進歩とともに日本側の「覆版」も改訂されており、和訳海図が使用されているとしても、その時期が問題となる。1900 年に刊行された『支那海水路誌、第 2 卷（第 2 版）』（1899 年刊英水路部刊行支那海水路誌第二卷中第十五編などによる。もちろん日本側の報告も参照している）の本文冒頭には、福建省のこの海域をカバーする覆版海図を示した図（「支那海水路誌第二卷關係圖索引」）を示している。このなかで

海図番号 290「兄弟嶼至鳥丘嶼」（1900 年刊、英国製海図 1760 号にもとづく、国立国会図書館 YG26-Z-831）および同 284 号「鳥丘嶼至東引」（1900 年刊、英国製海図 1761 号にもとづく、国立国会図書館 YG26-Z-809）を参照した可能性が高いと判断して検討したが、海図の縮尺が小さ

すぎ、とても海岸部のベースマップとして使えないことが判明した。ただし、厦門附近の図幅について、図郭の経緯度を検討したところ、290 号海図とよく一致し、経緯度を海図から得た可能性が高いことが判明した（図 2）。

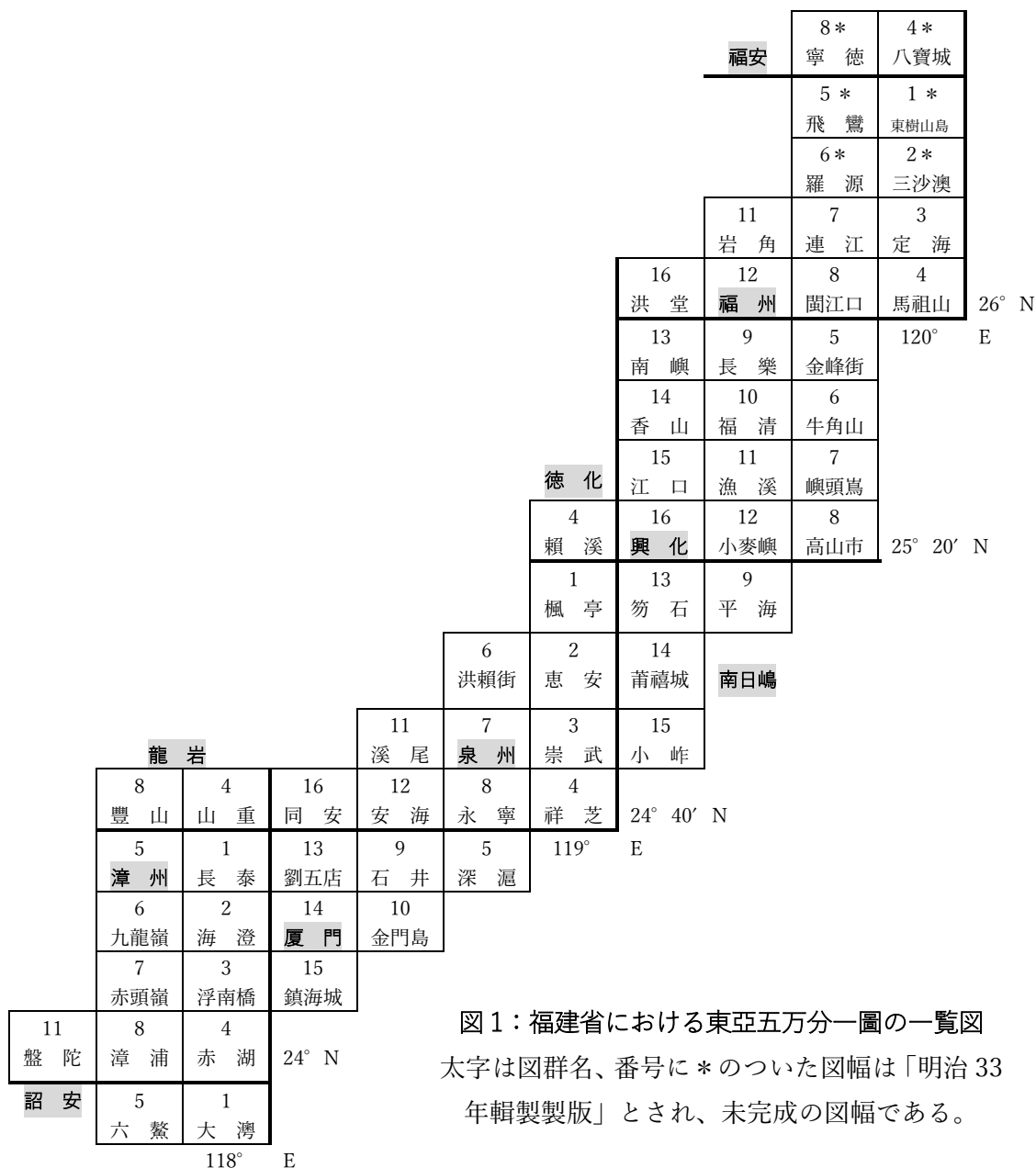


図 1：福建省における東亞五万分一圖の一覧図
太字は図群名、番号に*のついた図幅は「明治 33 年輯製製版」とされ、未完成の図幅である。



図2：東亞五万分一圖、廈門十四號「廈門」図幅の北東部分

北東角に経度（118度）と緯度（24度30分）を記入。小島嶼の海岸線まで詳細に記入している。

このため、現在では覆版海図（翻訳図）ではなく、より大縮尺の英国海図を参照したと考えるに至っているが、関連して重要なのは、表2および図1で福安および福州図群の番号に*をつけた6図幅である。これらの図幅には、「東亞五万分一圖」のタイトルがなく、図幅群と番号が記入されるだけである。また左上には「明治三十三年輯製製版」と記入されるだけで、「東亞五万分一圖」にみられるような刊記がない。明治33（1900）年は、久間ら測量技術者が福建省に出発した年である。また「輯製」は既存の図の編集によることを示すと考えられる。これから、この6図幅は久間らの測量成果なしに作製されたことがわかり、逆に彼らの活動を補助するために作製された可能性がうかがわれる。

その一部の例（福州2号「三沙澳」）を示すのが図3で、海岸線とともに島嶼や半島の等高線を描いている。図3ではあらわれていないが、図幅によっては山頂部分には標高を描く場合もみ

られる。ここで留意されるのは、「三沙澳」図幅の南に接する福州3号の「定海」図幅（図4）と比較すると、両者の図示範囲が整合せず、一部重なっているだけでなく、東西方向にもズレが明らかな点である。図郭の隅の経度（120度）と緯度（26度20分）は同じであり、「三沙澳」図幅の基づいた海図と「定海」図幅の基づいた海図がちがうことを示唆するように思えるが、両者にみられる、記入途上のような等高線はトレースしたように一致しており、もとにした海図のちがいだけでは解釈できない。以上のような図郭間の不整合は、「三沙澳」・「定海」図幅の西に接する「羅源」（福州6号）図幅と「連江」（福州7号）図幅の間でも確認でき、今後は参照された英国製海図の探索もふくめた検討が要請される。ただし上記の例は、久間らの福建到着前後に海図の海岸線や、等高線を抜き出した図3のような図が準備され、それをもとに彼らが作業したことを示唆するものと考えられる。



図3：福州2号「三沙澳」図幅（東京大学博物館蔵、地理部門 N43L に収納）の南東端部分

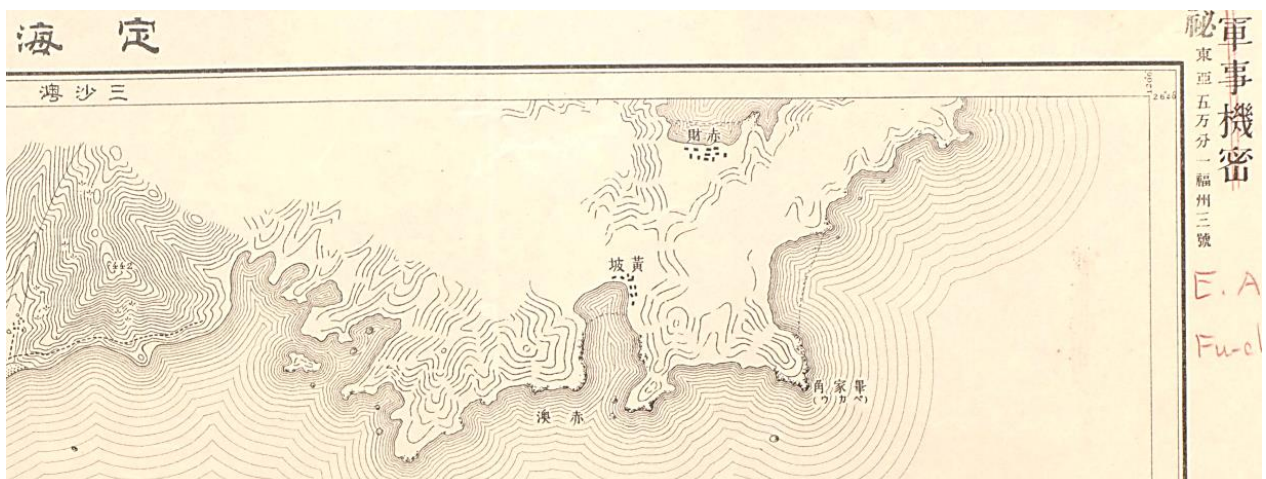


図4：東亞五万分一圖、福州3号「定海」図幅（アメリカ議会図書館蔵）の北東端部分

さらに東亞五万分一圖のその他の特色も検討したい。上記のように、各5万分の1図の図郭の右下には、高度をメートルで表記して、等高線の間隔を二十メートルとするという注記のほか、「圖式」を明治28(1895)年所定の「遼東半島五万分一圖々式」によるとする記載がある(図3にもみえている)。「図式」は地図に使われる記号などを定義するもので、「遼東半島五万分一圖々式」は日清戦争時に臨時測図部が

遼東半島で測量し、作製した図に適用された。名称からして外邦図用の図式であるが、残念ながらその細部についてはまだまとまった資料を発見していない。日清戦争後に領有することになった台湾について臨時測図部が測量し、作製された5万分の1図についても、この図式が用いられている。また並行して臨時測図部による測量が行われた朝鮮の図についても、この図式が適用されることになった(小林解説、印刷

中、明治 30 (1897) 年の記載)。

なおすでに述べたような、平板を使って交会法で図根点の位置を特定し、それをもとに携帯図板で細部の測図を行うという方法は、日清戦争時の遼東半島における測量に際しすでに規定されている(小林解説、印刷中、明治 27 (1894) 年の記載)。図式だけでなく、測量においても、当時の標準的な方法が適用されたことになる。

久間らの測量による図を一見して感じられるのは、図の周辺に測量が行き届かない空白部分が少なくないことのほか(図 4 参照)、漢字による地名の記入が多い点であろう。上記の『八省沿海全圖』に含まれている比較的大縮尺の海図と比較しても、地名の密度の高さがめだつ。これは既成の図にみられた地名を写したものではなく、久間らの測量にともなって収集されたと考えられるが、すでにみた河野の「經歷書」の「或ハ宿舍ヲ拒マレ或ハ地名ヲ教ヘス」という住民の態度からすると、それがどのように行われたか注目される。福建省の現地語に通じた、漢字にも知識を持つ通訳の存在を想定せざるを得ない。もちろん図にみられる漢字表記の地名が、当時現地で使われていた地名であることを確認する必要があるが、漢字地名の多くにカタカナの読みが記入されている点からも、現地での調査をもとにしていることがうかがわれるわけである。

なお北京語では Xiamen と表記される厦門については「エームン」と読みが書かれており(図 2 および本号表紙を参照)、むしろ英語表記の Amoy に近い。泉州についても「ソアンチュ」¹⁾と書かれ、北京語の Quanzhou とは差がある。表 2 には、漢字表記の図幅名に付されたカタカナを示している。やはり現地音にもとづくものと考えられ、漢字地名とその読みが、どのような調査によって得られたものか、さらに検討が必要である。

6. その後の福建省「東亞五万分一圖」

以上のように作製された福建省の「東亞五万分一圖」の地図学的な特色については、投影法などまだ検討すべきことが多いが、それらは今後の課題として、この図群がどのように取り扱われたかみておきたい。表 2 からすると、この 5 万分の 1 図の多くは、1902 (明治 35) 年に測図され、1903 (明治 36) 年から 1904 (明治 37) 年に製版された。さらに一部だけではあるが 1905 (明治 38) 年に製版がずれ込むことになった。これは日露開戦の直前から日露戦争期にあたり、戦闘地域となった遼東半島の製図や製版に忙しい時期にもかかわらず、福建省の 5 万分の 1 図の製図さらに製版作業が並行して進められたのは、どのような背景をもつか興味深いところである。

他方、日本の外邦測量について検討した高木菊三郎が、戦前期に作った「明治四十二年以降臨時測図部所測十万分一外邦図測図年紀概見図」(大阪大学蔵、画像は小林 2011: 口絵 2 参照)で、福建省海岸部の図の測図期を 1902 (明治 35) 年としている。華北以南の中国大陆のなかでもっとも早い時期となるが、これがすでにみてきたように 5 万分の 1 図の測図期であることに疑問の余地はない。ただし本稿の冒頭で指摘したように、中国大陆における地形図の縮尺は 1907 年以後基本的に 10 万分の 1 とされたことを考慮すると、この「東亞五万分一圖」はその後縮小されて 10 万分の 1 図として利用されたことが確実である。縮小に際しては、その後の変化を把握して補正された可能性も考えられる。「東亞五万分一圖」の利用を検討するには、このような 10 万分の 1 図として利用も考慮すべきであろう。

ところで久間金五郎は 1903 年秋になると、福建省での活動が評価されたらしく、朝鮮北部の海州地方、寧遠・昌城地方などの測量に派遣

されることになった（アジア歴史資料センター資料：B07090502100）。上述のように、この時期には日露戦争が迫り、朝鮮北部にいくつかの小グループが派遣されており、その一つと位置づけられる。これには陸地測量手の中利通、雇員の中尾芳太郎・三樹齋一が同行した。福建省で一緒だった中尾の参加は、久間の推薦によるものであろう。

その後も久間は外邦測量で活動することが多く、その方面での代表的な技術者として、特殊な任務を命じられるようになったようである（アジア歴史資料センター資料：C13110126100）。そうした観点からも、さらに久間の活動を追跡する必要がある。

むすびにかえて

以上、日清・日露戦間期の外邦測量の概観からはじめて、久間らの福建省における測量作業、それがもたらした現地社会への波紋、さらに作製された地図と検討を進めてきた。まだ検討が必要な点が少ないが、以上から、少数とはいえ測量技術者の活動が多面的にみえてくることになった。彼らがおこなった測量は、技術的に高度なものではなかったが、先行して作製されていた海図の利用にみられるように、当時得られていた地理情報を最大限に活用していた可能性は大きい。また荷物の運搬だけでなく、地名情報の取得のため、現地に詳しい漢字に通じた案内者を雇用していたことも推測された。

他方、ほとんどはじめてとあってよい秘密測量として、参謀本部もそのなりゆきに関心を持っていた。近代的な測量が進行していなかった中国大陆では、軍事行動に先行した地理情報の収集が不可欠で、まだその体制化が始まっていない時期という事情もあったのか、福島安正のような情報関係の高級将校が関心を寄せていたことも注目された。

冒頭でも指摘したように、秘密測量の実態がわかる例は少ない。ここで検討できた例は、その初期におこなわれた点でも注目され、今後さらに関心をもって検討していきたい。

謝辞 アメリカ議会図書館（LC）での「東亞五万分一圖」の調査については、同館 Geography & Map Division のミーンズ・節子さんには終始お世話になった。同館で調査させていただいた外邦図には、このほかにも注目されるものが多く、ひきつづき関心を持続させたい。また「東亞五万分一圖」にみられる漢字地名に付されたルビについては、片山剛大阪大学名誉教授（東洋史学）の示唆をいただいた。外邦図における外国地名の表記については、わかっていることが少なく、カタカナとはいえこのようなルビ付きの表記は貴重と考えられ、注目していきたい。

文献

- 沿海形勢及海防編委会編 2011.『沿海形勢及海防、第一輯、四、五、六』知識産権出版社。
- 小林茂 2011.『外邦図：帝国日本のアジア地図』中央公論新社（中公新書 2119）。
- 小林茂 2017.「『沿道指鍼』・『沿道圖説』・『沿道誌』」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会、164-165。
- 小林茂、印刷中 a「『陸地測量部沿革史（稿本）』解説」、小林茂解説『陸地測量部沿革史（稿本）』不二出版。
- 小林茂、印刷中 b「『外邦測量の沿革に関する座談会』の記録・解説」、小林茂解説『陸地測量部沿革史（稿本）』不二出版。
- 小林茂解説 2009.『外邦測量沿革史 草稿、第4冊』不二出版。
- 小林茂解説、印刷中『陸地測量部沿革史（稿本）』

不二出版.

小林茂・片山剛 2021.「『南清地方』をカバーする「清國二十万分一圖」について：アジア歴史資料センターの小山史料所収図の検討から」外邦図研究ニューズレター、12：93-99.

小林茂・片山剛 2022.「『清國二十万分一圖』に関する訂正と補足」外邦図研究ニューズレター、13：43-46.

小林茂・小林基 2013.「北清事変に際して作製された2万分の1『山海関』地形図」外邦図研究ニューズレター10: 53-59.

水路部編 1900.『支那海水路誌、第2巻、第2版』水路部.

高木菊三郎 1944.「我國陸軍に於ける軍用圖の概況」研究蒐録地圖(昭和19年6月)、39-41
(小林茂・渡辺理絵解説『研究蒐録地圖、第

三冊』2011年、不二出版所収).

高遠拓児 2007.「義和団事件後の参謀本部と南清官僚：1901年における福島安正の南清旅行をめぐって」『山根幸夫教授追悼記念論叢：明代中国の歴史的位相』汲古書院、213-238.

長南政義 2015.『新史料による日露戦争陸戦史』並木書房.

長南政義 2019.『児玉源太郎』作品社.

陳支平主編 2004.『臺灣文獻匯刊、第五輯、第九冊』九州出版社.

鳴海邦匡・渡辺理絵・小林茂 2022.「台湾遠征～日清戦争期までに台湾の主要港湾について作製された英国海図の翻訳(覆版)にみえる地名表記」地図(日本地図学会)60(1): 17-35.